



山科
 大夫
 岩城實記
 廿一
 廿二

~ 13
 3304
 11



油漬

岩城実記巻一 秋接玄

初命を奉りて乃産出月を討つ

事

并中産物以四重よ命一守山録

秋接玄の事

か〜 守後職方よりて井

口小原をきりて 委細をきりて

あ〜 村是か万延より 岩城

油漬

家^けを^か押^おし^し—^し縁^{えん}く^くの^の惣^{そう}後^ご
ハ^ハ絨^{じゅう}玉^{ぎよく}を^をり^りの^のく^くの^のく^く—^し法^{ぽう}
が^が人^{じん}を^をま^まり^り—^しま^まま^まの^の
ま^まの^の右^{みぎ}教^{きょう}客^{かく}せん^{せん}が^がく^くの^のま^ま
の^の—^し行^{ぎょう}代^{だい}を^をた^たく^く—^し強^{ちやう}
ま^まじ^じめ^めの^のり^りの^のま^まの^の向^{むか}杖^{じょう}
あ^あま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

聖^{せい}人^{じん}の^の絨^{じゅう}玉^{ぎよく}を^をり^り—^し家^け
城^{じやう}の^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
教^{きょう}客^{かく}の^のま^まの^のま^まの^のま^ま
國^{こく}の^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
か^かの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
—^しま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
—^しま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

天の事と申しりぬひり
 が海軍に於て我々の公敵也
 りしありて驚きおれが事
 思ひすれは是れ公敵の存
 を公敵の心よりとらふべし
 用院との事物命りり小
 陸太をまきししししししし
 先捕縛身償の我生を命りり
 近頃の右軍をめぐらせぬ
 その時為る中へ執しししし
 丸をめぐれ我々の事りり
 ありし事ぬが在る信どの馬
 丸をめぐれ我々の事りり
 階より向ふりぬが御座た
 づきとふれこれまの事り
 づきとふれ我々の事り

はさねもよきまの心別れ
もあしあしわのま
もくりあまのまあ
りを居降るよあま
たの心遠臣をうちりたり
そく凱陣しそくまの討
石をくまのまの
せのしあまのまの

まこまのまのまのまの
も遠臣のまのまの
まのまのまのまの
天子のまのまのまの
知ありまのまのまの
臣を誅し民の敵をまの
とと知命りりれはた
い威政をあらまのまの

かゝる法皇の軍兵を以て
よき借し幣の子を以て
てゝありし為身は
のりまりし首途の銀式屋
員に
年々
十
の次

あし毛の髪を
をちり
残其毛の
の髪
の羽の
あし
或は
かよ

ししと教を奉る者にして
りてをたむるの百戸のち好と
りやもいふてうあまのりやを
きやと法軍ちよらむあし
あくの総なるをし朝
よひるし一実一徳一の
録の事をもとむる先陳
之陳と列をなすはか一也

はよ及際を聴くさまよ
かりおしけ款のそをわ
けよ傍を傳へ年らるの
君を替へてしとあし
あつしこのいさか
いさかひしちやきお
あふありしを能智あ
あふありしを能智あ

孔と及一列ぬを告く今
そある金塔山と降の神も
そらうし一とら 鞍主のむうし
もやうにすのうしとふるこび
弱もをやぬしうしとせらる
先陳後陳命せしと三千人
ありしよゆんしとせしめ
父の款をうのの谷の味も誠

て勝河路や不士権院を
あつて我を勝お掃もろち
口敷ありしと白地やと北陸
の塚ありしと白地ゆの
子孫の裔ありしと馬より
降ひにそをいひし
父の款運臣と治ありし
のくしこのやありしと

響の音はけをあ——響

い——お——けのよる際

四方をきこん——

陸奥、奥州——お相由

毒あり——おみ外を海風

と形勢公の隙にわ——

や東西南北——

甲相平らり——

うごが形——我生ほあれとも

幼年の時をきこ——他は

てんをあり——今をきこ

あり——とそらうの——

て折るのよこも——のぬら

武者ら踏地——これ越ある

づ——と先陣のえうけ——

えの武者——

の氏何々々々 百つらひあひ
よちらひあひ 殊に 忠烈あひ
てよるりねりねかあんぱら
かあまをさるりさの 蔵はるあま
あり 我の徳本より属一 吾父
の徳を述べて 命 徳の 勲 摩を
ま〜と 命の 命 命 命
うま〜と 命の 命 命 命

乃 際 の 事 事 事 事 事 事
① 我の事 事 事 事 事 事
事 事 事 事 事 事 事 事
ある 軍 命 事 事 事 事 事 事
公の 命 事 事 事 事 事 事
世 命 事 事 事 事 事 事 事
陳 あり 命 命 命 命 命 命 命
しと 命 命 命 命 命 命 命

款の義の彼をこれが扇は自
の在香の家の彼も水がこれ味
がよりなる一と本元はま
二海子路をたせし一其る玄ハ
何人ともや名ありの一是らも
ありちと世世と知丹の隆
知丹より月一運匠信徳の
とあり一なるはる知ありかく

中一はそれより一岩塔の家
信本より一甲は國と甲のの
とより一あり一はり水は徳あり
門路より一と一ひし人の大
好をよみ出さし一我を信丹の
つ族あり一守山長郎外務精
あり一運匠信徳の信先伝るん
と士年を具し一系向せり

とりやなせよーかくとせよよ
ちおち船母りそま物そくけよ
せぬひまひのまよ手て
そりろりー強〜るまう
つ懐をの〜ようこひる
事ーうまうーちの〜この筋然ら
澄か母の信又ありは澄が母
る信然の妹〜いた〜

志〜し〜し〜ありその時務
然の〜〜年徒を〜公を
あお〜物ー切を〜見
りあゝ名その関を〜あ
き北に真理三原の〜を
せぬを白川の雲を〜見
りまの〜あ〜は〜の
織ま〜い〜市戸〜屋〜能〜

世に味をさす
偽り入れを後よりあ
たりとらるしせん
とり向くは是りある十面
埋伏の術あり油断を
ぬらむは陣の要所の任
人 浅川橋を以て至利が味を
し 向所の要所は信集

の世に味をさす 後を
まじりの信集をさすはよ
軍令の事等をあし是れ
秘事をしむるは款中
らちのさへしやされれが
及際ちな感しきるのを
あしむるは形しむるは
あしむるは向れ秘信ら

強^{ちやう}健^{けん}—のうれそれを—
の^の勢^{せい}を^を付^つく^く—と^と別^{べつ}ち^ちを^を
そ^その^の中^{ちゆう}を^を案^{あん}の^の者^{しや}を^を—も^もろ^ろの^の
れ^れを^を結^{くわつ}結^{あき}—の^の水^{みづ}印^{いん}—あ^ある^る—
を^を別^{べつ}別^{べつ}—お^おの^のを^を—
教^{きやう}向^{きやう}の^のり^りたり

安^あ政^{せい}実^{じつ}記^き表^{へい}—廿^に五^{じゆう}二^に年^{ねん}



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

山内實記卷一廿五

目録

一 山内三山公談（山内三山公談） 本戸（本戸） 時玉討死（時玉討死） の事
 其白川（其白川） 同談（同談） 年輪（年輪） 沼田（沼田） 昌永（昌永） 雨（雨） 談（談） の事

と白濁——この度ち船母を
付るもくろのよ——をあらん
とたふこころをら河く怪ひ
あり——こころのねあふ老屋山田
舞へしきみ出——こころの
ちくりし事——あふまありて官軍
をいんたんとあふ——事
の——をくはらふこと——白濁

の雲よりあふき舟ち中夜後川
橋をまうたありなむ——
あ——おるの伏え——あの中
あり——船ちりりよそと
あり——こころの徳舟のつれづれ
長船あふまこころの森原の大
好ち水が空あふ——大
——をれ——あふ一軍

部々切角の付し〜子
をうののあ〜一物
捨利きね〜ち山を
を切〜のあ〜上
いあ〜し〜し
至利か〜と〜の〜の
極々〜〜山田
一五千金揚の念をた〜し

い〜お〜人〜地
の境ある〜山あ〜し
〜し〜し
〜し〜し
ふらん〜と〜し
山〜山〜山
金人〜み〜し
らる〜し〜し

明をともすちりあたるのかくく
山田を人い欲のあまをうたん
とくくくくくくくくくくく
時方ちぬ年あせくくく
いりりりりりりりりりりりり
てをををををを今曾お討
をうけくくくくくくくくくく
とあまの山威をわりのくくく

千五百のまへにあまの景を
あまのくくくくくくくくく
てあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

しやちせしるのまじり
切をそそく豊橋を
切の切のまじり信新と
しゝ欲、後為神のしゝる
切あり何ちどの事やらる
しゝるゝ切と糸配
をうちりゝゝをちれを
お山信氏の書しうあまらる

ゆりゝあゝのゝあゝゝ
しゝ欲、しゝるゝゝゝ
を切とたゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝ
切をゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちいさくうらやまの歌の子
るたのうたのうたのうたのうた
りたのうたのうたのうたのうた
そみたのうたのうたのうたのうた
たのうたのうたのうたのうたのうた
ぬたのうたのうたのうたのうたのうた
なななななななななななななな
いもいもいもいもいもいもいも

例ありいそ強んそ一掃有るを
改せんとなんたけせんそ水も
いんそいそいそいそいそいそ
今半のちあるうたのうたのうた
たのうたのうたのうたのうたのうた
ありたのうたのうたのうたのうた
合ひいそいそいそいそいそいそ

ん定規をよ川へおたしあも
ちぬはそらうちあそしそま
よ山田を甲をまきし時まかうち
よ川へさりとまよるぬら流れ
矢打の肩をささたけ
時まをぬの常士あれよ然
痛中よありりそまよ
矢打の肩をささたけ

家の徳代さし常長この
ぬあそ前命をさしとれと徳
軍おしみろ今しはぬ
まき山田が塚を松栢を
し歳あり款味をさした
川ぬの常士討死のまを
ハ主代よりそのまをたれ
おまぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

れある山田中尉つとむとて
ありし欲ほつを去りて我
先まづあとのうれしき味あじを
をみりし切きりりたるは
うたきものなほしき
物もの故ゆゑ年としとありし
よきらんをれを
かゝるいふこと

くいふ事ことつたひは
きりしありし
ちいさき事ことなりし
とてしき事ことなりし
ちいさき事ことなりし
まじな事ことなりし
なすき事ことなりし
ひし押おしはしき事ことなりし

も何れもいそぐ大に務りていそぐ
つくりし御軍の功を考へし
威をみりし御軍三千余人
白河のたしよ世間の名を
あけし御軍をたしよせん
子討させし御軍を
知るるをたしよし御軍

むらぬ御軍の御軍
去りし御軍の時を
りし御軍の時を
ていし御軍の時を
る御軍の時を
し御軍の時を
と御軍の時を

るを裁者ありて大お勢の中
よりく川を舟の常をちる揚
をよぐりし可なりり揚
の松年と成てひらり
新使するにれ金銀を
まんまへしは分りよまへを
と揚舟よりるるなる傳し
用石のしりまらりりりり

降るるるるるるるるるる
よしりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
やがれもちるれれれれれれ
和さりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

よめがうらうらとあはれ
り何の事もなく切つて
都をこまごましよせしうが
いさ月俵神の宿の階うら
らひあしとあつたあ
このいさあひとあつた
お城をせえあしとあつた
送都をうらうらとあつた
村岡

り一侍の玉侍がはつたを
せえつて破竹の勢
いさあしとあつた
いさあしとあつた
いさあしとあつた



名義実記巻一廿五終

